

メッセージアウトライン 出エジプト記12:1~42 「過 越」

今までイスラエルの主なる神はモーセを通して九つの災害でエジプトを打たれたが、そのたびにエジプトの王ファラオは心を頑なにしてイスラエルをエジプトから出て行かせようとはしなかった。エジプトにとってイスラエル人は貴重な労働力であったのである。しかし、エジプトはこれらの災害によっていやというほど主なる神の恐るべき力とエジプトの偶像の神々の無力さを思い知らされてきた。そしてついに最も恐ろしい十番目の災いが下ることになる。それはエジプトの人から家畜に至るまですべての初子が死ぬという恐ろしいものであった。モーセは主からこのことばを受け、ファラオにこの恐るべき災害が起こることを告げるが、相変わらずファラオはモーセの言うことを聞き入れない。(11章要約) それで、いよいよこの十番目の災いが起こることになる。

[1-2]「主はエジプトの地でモーセとアロンに言われた。この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ」

これからイスラエルの歴史にとって非常に重大な出来事が起こる。それゆえに主はこのように言われたのである。「この月」は13:4節を見ると「アビブの月」と呼ばれたことが分かる。アビブとは「穀物の穂」を意味する。それはちょうど穀物が穂を出す頃であり、太陽暦の四月頃に相当する。

[3]「イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい」

主がこれから告げられることはイスラエル人全員が守らなければならないことである。当時のイスラエルはひと月を三区分して十日を区切りとしていた。この十日目に家族ごとに羊を一頭用意する。

[4] もし家族が少なくて羊一頭分が余るなら、それは隣の家の人と人数に応じて分ける。

[5]「あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない」

The animals you choose must be year-old males without defect, and you may take

them from the sheep or the goats. (New International Version)英訳

この「羊」へブル語では(セー)ということばで羊でもやぎでもどちらにも用いることのできることば。それでここでは「子羊かやぎのうちから」と説明されている。

[6-7]「あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイスラエルの会衆の集会全体は夕暮れにそれを屠り、その血を取り、羊を食べる家々の二本の

門柱と鴨居に塗らなければならない」

十四日の夕暮れとはその月の真中を意味する。イスラエルでは夕暮れから次の日が始まる。「屠る」とは屠殺すること。「門柱と鴨居」は家の入口の部分でそこに血が塗られるということは非常に目立つ。そしてこの子羊の血こそやがて救い主として世に来られるイエス・キリストの死を象徴するものであった。当時のイスラエルの民はそんなことは少しも知らなかったが、新約時代になるとその意味がはっきりとわかるのである。→ヨハネ1:29、I ペテロ1:18~19

[8-10]「そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならない。生のままで、または、水に入れて煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは燃やさなければならない」

「種なしパン」…イースト(酵母)が入ってないパン。膨らまない。腐敗しにくい。発酵するまで待つ必要がないので短時間でできる。種を入れたパンは道徳的腐敗を象徴するものとして聖書ではしばしば言及される。→マタイ16:6、I コリント5:6~8、ガラテヤ5:9、「苦菜」…苦みのある野菜。(チッコリー、コショウグサ、タンポポ等)これはエジプトで受けた長年の苦難を表す。

肉を生そのまま食べることの禁止は異邦人の魔術的な行為にそのような食べ方があったからと思われる。水で煮て食べることの禁止は、そのために切り分けてしまうことのないようにとの配慮か。

子羊は一頭のまま焼かれて、それを一緒に食べるということで、皆が一つ心になって交わることの象徴と思われる。そしてそれは完全に成し遂げられる必要がある。朝まで残さず全部食べて、もし残ったものがあれば燃やすというのもそのような意味であろう。

[11]「あなたがたは、次のようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる。これは主への過越のいけにえである」

これはいつでも出発できる身なりをして食事をするということで、緊張感がある。「過越」…これは主が通り過ぎて行く、飛び越して行くという意味でその詳しい説明は12節以下。

[12-13]「その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての長子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下す。わたしは主である。その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす者のわざわいは、あなたがたには起こらない」

主はその夜、人から家畜に至るまでエジプトのすべての長子を打たれる。そしてエジプトの神々にさばきを下される。エジプトでは神々はいろいろな動物を住みか

として宿り、またこれらの動物が神々の化身であると考えられていた。しかし、それらの初子もみな打たれて死ぬ。そしてイスラエルの主こそ真の神であり、偶像の神々には何の力もないということが思い知らされるのである。この時、主は子羊の血が門柱と鴨居に塗ってある家(イスラエル人の家)はその血を見て、通り過ぎて行かれる。つまり、その家の初子は死なないのである。しかし、その血が塗られていないエジプト人の家の初子は打たれて死んでしまう。これが第十番目の災い「過越」である。

[14] この日はイスラエルにとって記念となり、主への祭りとして祝い、この日を代々守るべき永遠の掟とすべきことを告げられる。この日は過越の祭りとしてイスラエルで世代を超えて受け継がれていくことになる。

[15-20] 最初の月の十四日の夕方から、その月の二十一日の夕方まで七日間種なしパンを食べる。すべてパン種の入ったものを食べる者は、寄留者でも、この国に生まれたイスラエル人でもイスラエルの会衆から断ち切られる。→除外される。最初の日と七日目に聖なる会合を開く。いかなる仕事もしてはならない。

パン種を入れないパンを食べるということは、イスラエルの民が大急ぎでパンを作ってエジプトから出て行かなければならなかったことと、パン種の入ったパンは腐敗しやすいため墮落と悪の象徴と考えられたからである。もちろん年がら年中、パン種を入れないパンを食べるというのではなく、このエジプト脱出を記念する過越の祭りの間だけである。永遠の掟としてこの日を守る。→14節

[21-28] それでモーセはイスラエルの長老たちをみな呼び寄せ、彼らに主によって命じられた過越の儀式を実行するように伝えた。長老たちを通してそれはイスラエルの全家族へと伝えられていく。「ヒソプ」…はっか科の多年草で茎の高さ50~100cmで石垣や岩間に生え、花と葉には芳香があり薬用にも用いられる。このヒソプを束にして子羊の血に浸して、家の門柱と鴨居に塗る。この日の夜はだれも自分の家の戸口から出てはならず、この夜、主がエジプトを打つために行き巡られ、鴨居と二本の門柱に塗ってある血を見たら過ぎ越して行かれ、イスラエル人は死ぬことはない。しかし、それが塗ってないエジプト人の家の初子はみな打たれ、死ぬのである。

過越の儀式は神の救いのみわざを子孫のために最も効果的に伝える方法である。この儀式を通して子どもたちに神の救いのみわざを知らせ、教育していくのである。

これを聞いたイスラエルの民はひざまずいて礼拝し、命じられたとおりに行った。(27-28)

過越の時に家の門柱と鴨居に塗られる子羊の血はイエス・キリストの血による贖いを示している。聖餐式のパンとぶどうジュースは私たちの罪の贖いのために十字架にかかって死なれたキリストの裂かれたからだからだと流された血を覚えて行う。→ I コ

リント11:23-26

[29-30]「真夜中になったとき、主はエジプトの地のすべての長子を、王座についているファラオの長子から、地下牢にいる捕虜の長子に至るまで、また家畜の初子までもみな打たれた。その夜、ファラオは彼の全家臣、またエジプト人すべてとともに起き上がった。そして、エジプトには激しく泣き叫ぶ声が起こった。それは、死者のいない家がなかったからである」

これは長い間、イスラエル人を奴隷として苦しめ、虐げ、イスラエル人の子どもをナイル川に投げ込んで殺し、安価な労働力としてこき使ってきたエジプトに対する主の厳しいさばきであった。

むごい仕打ちに対しては主の厳しいさばきが待っている。→ヤコブ2:13

[31-33]「彼はその夜、モーセとアロンを呼び寄せて言った。『おまえたちとイスラエル人も立って、わたしの民の中から出て行け。おまえたちが言うとおりに、行って主に仕えよ。おまえたちが言ったとおりに、羊の群れも牛の群れも連れて出て行け。そして私のためにも祝福を祈れ。』 エジプト人は民をせき立てて、その地から出て行くように迫った。人々が『われわれはみな死んでしまう』と言ったからである」

ナイル川の水が血に変わる、蛙、ブヨ、アブ、疫病、腫れもの、雹、いなご、暗闇と打ち続いた九つの災害にもかかわらず、心を頑なにしてイスラエルをエジプトから出て行かせようとしなかったファラオもついに自分の長子も打たれ、死ぬという事態の中でついにイスラエルをエジプトから出て行かせる許可を与えないではいられなかった。ファラオ以外のエジプト人も自分たちも全部死んでしまうのではないかという恐怖感の中で、強制的にイスラエル人を追い出そうとした。

[34-36]「それで民は、パン種を入れないままの生地を取り、こね鉢を衣服に包んで肩に担いだ。イスラエルの子らはモーセのことばどおりに行き、エジプトに銀の飾り、金の飾り、そして衣服を求めた。主はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプト人は彼らの求めを聞き入れた。こうして彼らはエジプトからはぎ取った」

エジプトから出て行くに際して、エジプト人から金、銀、衣服を求めることは、すでに11:2で主がモーセを通してイスラエルの民に語り聞かせていたことであった。そしてそのことが実際に実現するように、主がエジプト人の心に働きかけてくださったので、エジプト人は彼らの求めを聞き入れたのであった。「彼らはエジプトからはぎ取った」とあるが、イスラエル人にとっては家も家財道具も置いたまま出て行く代償であり、また、長い間エジプトで奴隷として苦役に就かせられたことの代償であった。そして、それはまた主が彼らの先祖アブラハムに約束された預言の成就でもあった。→創世記15:14 またこの金、銀、衣服はやがてシナイの荒野において神の幕屋を建設するための材料の一部となるのである。

[37-39] このようにしてイスラエルの民は彼らが住んでいたナイル川東部のデルタ

地帯にあったラメセスからスコテに向かって旅立った。「スコテ」…ラメセスから南東に50kmほどの地であると思われる。「女、子どもを除いて、徒歩の壮年の男子は約六十万人であった。さらに、入り混じって来た多くの異国人と、羊や牛などおびただしい数の家畜も、彼らとともに上った」…それで女性や子どもたちも一緒に数えるならば軽く二百万人は越えたことであろう。まさに民族の大移動である。

彼らは大急ぎで出て来たので食糧の準備もできず、パン種を入れてないパン菓子を作って食べた。

[40-42]「イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。四百三十年が終わった、ちょうどその日に、主の全軍団がエジプトの地を出た。それは、彼らをエジプトの地から導き出すために、主が寝ずの番をされた夜であった。それでこの夜、イスラエルの子らはみな、代々にわたり、主のために寝ずの番をするのである」

これは主がイスラエルの民をエジプトから脱出するのを一晩中見張り、守ってくださったということで、擬人法で表現されている。このことを覚えてイスラエルの民はみな毎年この日に主のために過越の祭りを守り、寝ずの番をすることが代々の定めとなったのである。

ついに第十番目の災い「過越」が起こり、エジプトの人から家畜に至るまで初子はみな打たれて死んだ。イスラエル人の家は屠られた子羊の血が門柱と鴨居に塗りつけてあったので、主はその家を過ぎ越され、何の被害も受けなかった。この出来事により、ついに頑ななファラオも折れてイスラエルをエジプトから出て行かせることとなった。イスラエルの神、主の偉大な力が過越に至る十の災害によって存分に現わされ、エジプトはさばかれ、その偶像の神々もさばかれ、ついに新しい時代が始まるのであった。

そしてこの過越の子羊こそ、やがて来られる神の子羊イエス・キリストの型であった。子羊の血を門柱と鴨居に塗られた家は主が過ぎ越して行かれたように、神の子羊イエス・キリストが十字架上で流された血によって、私たち人間は罪を赦され、神のさばきに会うことなく、救われるのである。

イエス・キリストの死は私の罪のためであったと信じ、このお方を救い主として受け入れる者は救われ、神のものとされ、さばきに会うことなく、永遠のいのちをいただくことができるのである。

私たちは神の子羊イエス・キリストの十字架の犠牲の死、その贖いに心から感謝し、罪赦され、贖われ、神に愛され、神のものとされた者として、それにふさわしく互いに助け合い、励まし合って生きる者になりたい。→ I ペテロ1:18～19、I ヨハネ4:9～10